

『だめじゃ、ないだろう……？ほら、聴いてみなよ、これが君の、淫らな可愛いおまんこの音だよ……』

「……ツツ、！！?!、」

突如両耳のイヤホンから、ぬちゅっ♡ぐちゅっ♡♡という、卑猥すぎる水音が聞こえます。しかもそれは、股下で上下する鉄の棒とタイミングを同じくしていた。何も考えなくとも、これが自分自身のなかの音だとわからされる。

『どうだい？とってもいやらしくて、いい音だねえ……？』

「あああ” あ……っつ、♡♡♡♡♡♡」

下腹の奥を同じ速さで攪拌される淫楽と、両耳から流れる卑猥な水音、低い男の声とで、頭がおかしくなりそうだ。

高性能なイヤホンは立体音響で、すぐそばで男に囁かれているかのようだ。

孔のなかのぬかるみの音も繊細すぎるほどに鼓膜を打ち、彼の声と水音とに脳内まで犯されていく。

『ああ……君は今も、昔と変わらず可愛いね……。今日は僕のことを思い出してくれて、約束も思い出してくれた……。僕らにとって、最高の記念日だね……』

